

「図書館はあなたたちを歓迎します」 ー国際交流基金関西国際センター図書館の取り組みからー

今西 加奈*, 河田 隆*

世界各国から集まってきた研修生に対して、蔵書 57,000 冊の小さな専門図書館が、どのようにサービスしているか、研修活動のサポートを行っているかについて述べる。日本語研修施設で行われている研修活動での図書館の役割に関する実践報告である。

キーワード：図書館、国際交流、訪日研修



本稿は、クリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供する (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>)。

1. はじめに

国際交流基金 (JF) 関西国際センター (以下、センター) は、海外で日本語を学ぶ人たちのための滞在型研修施設として、1997 (平成 9) 年に大阪府泉南郡田尻町に設立された。センターは、海外の外交官、公務員、研究者、大学院生などを対象とした訪日研修を実施している。また、海外で日本語を学んでいる大学生や高校生が滞在することもある。東南アジア、アフリカ、中央アジア、ヨーロッパなど、さまざまな国の人たちが来日し、日本語や日本の文化を学んでいる。

センター図書館は、主に人文・社会科学系の日本に関する資料を多言語で収集している専門図書館である。センターの 2 階にあり、蔵書は約 57,000 冊 (日本語資料約 7 割、外国語資料約 3 割)、雑誌 310 タイトル、新聞 6 紙 (日本語／英語の 2 言語)、視聴覚資料 1,927 本 (2024 年 3

月末現在) という環境を、専任司書 2 名 (内 1 名は嘱託)、アルバイト職員 1 名で運営している。図書館の主な利用者は、研修参加者 (以下、研修生)、日本語教育専門員、センター職員・スタッフであるが、外部一般の方誰でも利用できるように広く開放している。

本稿では、主に訪日研修に参加する研修生を対象にした当館の取り組みを紹介したい。

2. 関西国際センターの研修について

2.1 どんな研修？どんな研修生？

センターでは、年間約 30 の研修を実施している。国際交流基金主催で研修生を招聘するタイプや、他の組織、団体からの受託研修などである。参加人数は、少ないものは 5 名程度、多いものだと 60 名を超える。30 名ぐらいのものが多く、期間は 1 日だけの短いものから 8 か月間の長いものまで様々である。2 週間から 1 か月程度のものがほとんどだ。

研修生の出身国も様々だ。目立つのは、東南アジア、中南米、アフリカと言ったところだろうか。いろいろな国のいろいろな人たちが、センターに現れては去ってゆく。

研修生は期間中、主に日本語の勉強をしている。研修方法は多様で、講義形式もあれば、グループに分かれての討議、発表形式もある。茶道、華道、書道などの日本文化体験や浴衣の着付け体験なども行われている。

図書館は、このような多様な研修に対応して、資料面で研修活動をサポートすることを任務としている。

2.2 研修のサポート

それでは、具体的にどのようにサポートしているか見てみよう。研修活動をサポートするにあたって、いつも考えているのは、「どうやって図書館に来てもらうか」「どうやって本を借りてもらうか」という事である。とにかく図書館に来てもらわなければ始まらないのだ。

そのための取り組みの中心となるのは、次の二点である。

- ① 図書館オリエンテーション
- ② 本の展示



図 1 当館の風景

*いまにし かな, かわた たかし 国際交流基金関西国際センター図書館

〒598-0093 大阪府泉南郡田尻町りんくうポート北 3-14

(原稿受領 2025.1.14)

この二点の取り組みを進めるにあたって、前提となるのが研修担当者（日本語教育専門員と事務担当職員）との協力関係である。図書館オリエンテーションの場合でも、本の展示の場合でも、その研修が何を目的としているか、研修の授業で取り上げられる本は何か、研修生個々の関心は何かについて、事前に把握しておくことが重要である。これらの情報は、研修を担う担当者に教えてもらうのが一番だ。その情報に従って、私たち図書館員は、説明すべき内容と展示すべき本を決めることになるのである。

2.2.1 取り組み① 図書館オリエンテーション

オリエンテーションの一環として、すべての研修のスタート時点で、図書館ガイドの時間が設定されている。20分くらいかけて館内を案内し、利用方法を説明し、図書館がどんなところか分かってもらうのが目的である。

まず、利用案内と館内マップを配る。お薦めのブックガイドを付ける時もある。利用案内は、研修生の日本語レベルに応じて、日本語版と英語版を用意している。利用案内に沿って、開館日、利用時間等の基本的な説明を行う。この際に強調するのは、「本は何冊借りてもいいです」ということと、「この図書館にない本でも日本全国の図書館から取り寄せます」ということと、「無料です」ということである。この3点はとにかく強調する。手を振り回しながら、繰り返して言う。なぜ手を振り回すのかというと、英語で説明する時など、スーッと言葉が素通りしているような感じで、相手に伝わっているのかいないのか判然とせず、不安に駆られて思わず手を振り回すことになるのである。

その後、館内を回りながら、いくつかのポイントで説明を加える。特に力を入れるのは、その研修のために集めた展示本のコーナーである（後で詳しく説明）。日本語多読のコーナーも抜かすことができない。このコーナーには、市販されている日本語多読本だけでなく、センターの日本語教育専門員や研修生が作った日本語多読のための資料も並んでいる。この図書館の特色の一つだ。

それから、時間があれば一般書架の説明に移るわけだが、研修の性格によって、紹介する棚を変えるようにしている。



図2 図書館オリエンテーション
© 2024 Tui Tuia | Learning Circle

2.2.2 取り組み② 本の展示

研修担当者から教えてもらった情報に従って、展示するための本を集める。日本語教育関係の本はもちろんとして、最近はSDGs関連の本を展示することも増えた。授業の題材として、資源のリサイクルなどが取り上げられるからだ。他にもダイバーシティ、バリアフリー、食育など様々である。

授業で取り上げられるテーマに関する展示ばかりではない。日本文化体験で研修生が浴衣を着る時は着付けの本の展示コーナーを作ったり、研修旅行で広島に行く機会には広島の観光ガイドブックや原爆関連の本を展示したりといった具合である。

突発的な展示もある。作家や文化人が亡くなったというニュースを聞けば、できるだけ早く（その日の内に）その人の作品を集めてコーナーを作る。これとは別に、定期的な「月展示」として、月一回テーマを決めて日本文化に関する本を展示している。

本集めは、まずは自分の図書館の棚から。しかし、それだけで終わることは、ほとんどない。必要な本が足りないのだ。そこで、他の図書館から必要な本を取り寄せることになる。この点については、後でまとめて説明したい。

集めた本を展示コーナーに並べて、「8月展示 おばけの本」などの表示を貼って、コーナーは出来上がる。後はポスターを作って掲示板に貼る。そして、「こんな展示をしています。みんな来てね。」の案内を研修生に送る。必要事項のやり取りをする研修生用のチャンネルがあって、そこにupするのだ。Excelで作成した展示本のリストと、コーナーの写真も一緒に添付する。こうして書くとなんと言ったこともないが、結構手間な作業である。しかし、このお知らせ情報が、研修生と図書館をつなぐパイプなのだ。



図3 当館の展示

2.2.3 その他の取り組み：多言語おはなし会

当館では、大阪府泉南郡田尻町のボランティアグループ「はっぴいぶつく」の協力を得て、「世界の国からこんにちは」と題した多言語おはなし会を開催している。文化・学術専門員研修と外交官・公務員研修の研修生から希望者が

募り、参加を希望した研修生は、地域に住む子どもたちの前で、出身国の言語で絵本の読み聞かせを行う。

参加者が決まったら、読む絵本と順番を決め、当館事務室内で一度声に出して練習する。『おおきいちいさい』、『ぴょーん』、『きんぎょがにげた』など比較的短くて分かりやすい絵本をあらかじめ準備し、その中から読みたい本を選んでもらっている。読む絵本は、研修生によって様々であるが、紙芝居を選んで、フランス語で読んだ研修生もいた。

おはなし会当日は、「はっぴいぶっく」の方に進行してもらう。研修生は、事前に練習をしているとはいえ、おはなし会当日は少し緊張している。しかし、いざ本番となると表情がだんだん和らいできて、楽しそうに絵本を読むので、見ている方も楽しくなってくる。参加した研修生からは、「楽しかった！また読みたい」と好評である。聞いている子どもたちも、外国語は分からなくても、よく知っている絵本なので、興味深く聞いている。研修担当の日本語教育専門員や職員・スタッフからも、「自分たちが知らなかった研修生の一面を知って、驚いた」との意見をいただいている。

3. 外交官・公務員研修と文化・学術専門家研修

3.1 二つの代表的な研修

次に研修の具体例として、外交官・公務員研修と文化・学術専門家研修を紹介しよう。この二つの研修が、期間の長さの点からも、図書館に関わる度合いが大きいという点からも、センターの代表的な研修であると言える。

3.2 外交官・公務員研修

外交官・公務員研修は、世界各国から外交官、公務員を招聘して行われている。期間は8か月間(研修の中で最長)である。外交関係の将来を担う知日派の外交官・公務員を養成することを目的としている。研修生の内訳は、外交官30名程度、公務員5名程度である。東南アジア、中央アジア、中南米、アフリカの国々からの参加者が多い。

研修期間8か月という長丁場であり、参加人数も多く、研修生一人一人の個性も際立っていることから、研修全体の中で大きな位置を占めている。研修が終わった後は、「ほっ」としたり、ロス状態になったりとなかなか複雑な感情を味わうことになる。

3.2.1 図書館オリエンテーション

外交官・公務員研修のスタートの際にも、図書館ガイドが設定されている。ほとんどの研修生は、日本語学習経験がないため、説明は英語を使用しなければならない。これが結構な負担となる。担当者用に引き継がれている英文の説明原稿があり、これに毎年手を加えて、当日はひたすらカンペを読むのである。この図書館に勤めていた経験を持つ大先輩から、「図書館で本を借りられるという事が伝わればいいのよー」と励まされたりして、何とか乗り切っているという状態だ。

館内の案内コースは、他の研修とほとんど一緒だが、力

を入れて説明するところが2か所ある。一つは、この研修のために集めた本の展示コーナー(後で詳しく説明)。もう一か所は世界各国の観光パンフレット類を集めたコーナーである。今までセンターを訪れた研修生が、自分の国のパンフレット類を置き土産として残して行ってくれている。それを国ごとにBOXに入れて並べているのである。およそ100か国のBOXが並んでいる。研修期間中には、地域の人たちとの交流を目的とした「ふれあい交流まつり」や、地元の小学校訪問など、研修生が自分の国を紹介する機会が多くある。そういう時に、このBOXの中の資料が大活躍するのである。

3.2.2 図書館展示

(1) 図書館ガイドでの展示

次に、図書館展示の説明に移ろう。まず、一つは図書館ガイドの際の館内展示である。ポイントは、「歓迎」である。遠い国から集まってくれた研修生に対して、「図書館はあなたたちを歓迎する」というメッセージを全身で表現するのだ。具体的には次のようなことをしている。

- ① 研修生の出身国を紹介している資料(できればその国の言語で書かれた資料、なければ英語の資料、それ明なければ日本語の資料)を展示する。
- ② 研修生の出身国に関する物品(人形とかお皿とか民芸品とか)を陳列する。過去に研修生が置いて行ってくれたものがたくさんあるので、それを引っ張り出して陳列するのである。
- ③ 研修生の出身国の位置に印を付けた世界地図を展示コーナーに掲示する。
- ④ 研修生の国の言語で「こんにちは」を意味する言葉のカードを作って、カウンターなど、研修生の目に付きやすい所に貼る。

大体こんな感じである。「全身で表現」などと大げさなことを言ってしまったが、ごくごく当たり前のことばかりだ。

一点目の「研修生の出身国を紹介している資料」については、もう少し説明が必要だろう。「国を紹介している資料」は、国によって出版点数が全然違う。多い国は多い。しかし、無い国は全く「無い」。仕方なく、前述のBOXの中の薄い観光パンフレットを展示したりするのだが、それさえ無い国もある。その国に関する資料が全くゼロなのだ。

そんな時は、その国の大使館に、パンフレット等の寄贈を依頼したりもする。しかし、協力してくれる国はごく僅かである。現在、他の方法を模索しているところだ。

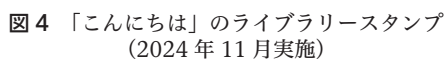
(2) 研修期間中の展示

研修開始後の展示については、「2.2.2 取り組み②本の展示」で述べた通りだが、外交官・公務員研修に関しては特に留意している点がある。それは、言語のことだ。研修開始時点では、ほとんど誰も日本語を読むことができない。だから、展示する本は日本語以外の言語で書かれたものを選ぶ。研修生の国の言語で書かれた本を展示すればいいわけだが、そんな本はめったにない。日本のおばけについて書かれたシンハラ語の本を所蔵している図書館がどれだけあるだろうか。やむを得ず英語の本を中心に展示する

研修生の国の言語で書かれた本の必要性を感じることは多い。バングラデシュの研修生が、古いボロボロのベンガル語訳の『坊ちゃん』（夏目漱石著）を借りて行ったりする。そういう姿を見るにつけ、できるだけ多様な言語の本が欲しいと思う。そうは思うのだが、いろいろな制約から多言語資料の収集は進まないのが現実だ。

外交官・公務員研修では、図書館への来館を促すため、研修期間中の2～3週間に1回「ライブラリストンプ」というイベントを行っている。このイベントは、研修生が図書館に来て、図書館が指定したワード（「こんにちは」、「ともだち」など）を自分の国の言葉で短冊に書いて、大きな台紙に貼って、センターにいる皆で共有しようというイベントである。

各回のワードの発表は研修生連絡会で行っている。前回の台紙を持って行って、研修生や担当の日本語教育専門員、職員に見せている。その際に、研修生の中から数人を当てて、自分が書いた短冊の言葉を読んでもらっている。参加者によっては、使い慣れた言葉を言える機会、センターの皆に自分の国の言葉を紹介できる機会とあって、元氣よく教えてくれる。その姿が誇らしげに見えて、聞いているこちらもちょうど楽しい気持ちになる。また、この研修生連絡会への参加は、図書館で姿を見かけない研修生の様子を知りたい機会にもなっている。



情報の科学と技術 75 巻 3 号 (2025)

調査・研究の代行ではないか。」と職員 A は言う。「そんなにストイックに考えなくてもいいじゃないの。研究の役に立てばいいんだから。」と職員 B が言う。A「研究に必要な本を選ぶのは研修生自身なのだから、図書館はそこに踏み込まない方がいい。」B「こんな本があります、と薦めてもいいのでは。その上で、読むか読まないかは研修生が決めればいい。」A「必要な本を探し出すことも研究活動の一環です。それは、研究の楽しみでもある。探していた本を、自分の力で見つけた時の喜びは大きい。」B「でも、大きな大学の留学生だったら、そこの図書館に行くだけで直接本に触れて、読むことができる。他から借りてきた本を研修生に見てもらうのは、大学の留学生の立場に少しでも近づけようという、せめてもの条件整備だ。」

こんな感じである。結論は出ていない。出ていないまま、「取り敢えず、やってみよう」で続けている方法である。小さな図書館ゆえの、止むを得ない方法と言えるのかもしれない。

3.3.2 情報検索ガイド

文化・学術専門家研修の研修生は、各自、日本に関する研究テーマを持っており、専門的な資料を必要としている。自ら情報収集活動が行えるように、授業の何コマかを使って、情報検索ガイドを実施している。「図書編」と「論文・便利な情報編」との2回に分けて、各1時間半ずつの授業である。研修生が早期に情報収集を進められるよう、研修スケジュールの初期（来日から1ヶ月以内）に2回に分けて実施している。

「図書編」では、国際交流基金図書館のOPACと他の大学図書館の本を探すwebサイトとしてCiNii Booksを紹介する。「論文・便利な情報編」では、論文をさがすwebサイトのCiNii Research、研究者を探すwebサイトであるresearch map、デジタルアーカイブを探すwebサイトの1つとして国立国会図書館デジタルコレクションを紹介している。webサイトの使い方を説明した後は、検索演習の時間を10分ほど取り、各自の研究に関係のある資料を探してもらう。検索演習の時は、私たち図書館員は教室を回り、研修生の質問に答えたり、研修生の検索の様子を確認したりしている。また、研修生が設定したキーワードが適切か等のチェックも行っている。

情報検索ガイド実施にあたっては、研修を担当する日本語教育専門員と研修開始前に打ち合わせを行い、各自の研究テーマを把握している。また、研修生が図書館に来館した際に話した研究テーマも合わせて頭に入れておく。そうすることで、演習の際にキーワード設定に困った研修生がいれば、サポートがしやすくなる。

さらに、文化・学術専門家研修6ヶ月コースでは、国立国会図書館関西館へ訪問する機会もある。その事前準備として、「NDLガイド」と称して国立国会図書館サーチの使い方も紹介している。

この事前準備の時間があることで、各自の研究に関連する資料が関西館にどのくらいあるか調べて、閲覧したい資料を事前にピックアップすることができる。「訪問日当日

の時間を効率よく使うことができた」という感想も研修生から寄せられている。

4. 図書館ネットワークについて

今まで見てきたように、私たちの図書館のサービスは、他館との連携によって支えられている。他の図書館からの借用本なしでは、本の展示も研修生への資料提供も非常に貧弱なものになってしまう。最後に、私たちの図書館が関わる図書館ネットワークについて説明したい。

本を借りる際にまずチェックするのは、国際交流基金所属の2館（東京の本部ライブラリー、埼玉の日本語国際センター図書館）の蔵書である。それぞれ特色のある蔵書構成であり、頼りになる存在だ。物流も保障されている。通常で週に1~2回、臨時便も含めると、いつでも資料の搬送が可能である。

次にチェックするのは、大阪府立図書館を含めた大阪府内の公共図書館の蔵書である。有難いことに、大阪府立図書館が提供する蔵書検索システム「大阪府内 Web-OPAC 横断検索」で、府内公共図書館の所蔵状況はすべて把握できる。さらに有難いことに、見つかった資料は、最寄りの図書館（私たちの場合は田尻町立公民館図書室）まで車で運んでくれる。しかも週1回のペースである。しかも無料である。本当に助かる。

この支援体制なしに、私たちの図書館のサービスは成り立たない。この体制を担っている府立図書館に、この場を借りて御礼を申し上げたい。また、府内の図書館システムの窓口として、日常的に私たちからの資料要求に応じている田尻町立公民館図書室にも、合わせて御礼を申し上げたい。

府内公共図書館で見つからない本もかなりある。学術書、専門書などは、ヒットしないケースが多い。そんな時は、CiNii Booksで大学図書館の本を探す。当館はNACSIS-CAT/ILLに加入しており、全国の大学図書館の資料を利用できる。これも、条件として恵まれている点だ。公共図書館の蔵書と大学図書館の蔵書の両方にアクセス可能なのだ。ここまでで、ほとんどの資料は見つけることができる。

それでも見つからない時は、全国の公共図書館に当たる。国立国会図書館サーチや、カーリルの情報が頼りである。そして、最後の最後は国立国会図書館である。

5. おわりに

ここまで読んでくれた方はわかると思うが、この図書館はかなり特殊な図書館である。次の2点が大きいと思う。

①主な利用者は研修生であり、外部利用者はごく少数に限られる。

②研修生は短期間（一番長くて8か月間）で入れ替わる。継続した利用がない。

外部利用者、つまり不特定多数の利用者が少ないという点で、公共図書館とは大きく違う。また、短期間で利用者が入れ替わるという点で、大学図書館や学校図書館とも異なる。

このような違いはあるのだが、一方で、利用者に向き合っ
てサービスを行うという点では、他の図書館とも共通の
ものがあるのではないかと考えている。

また、今まで紹介してきたように、当館の特色は、海外
出身の利用者に対する資料提供という点にある。サービス
対象が「海外出身の利用者」であるために、もちろん様々
な工夫が必要になるが、さりとて日本人相手の場合とさほ
どの違いがあるとも思えない。どちらにせよ、相手の要求
をいかにつかむか、その要求に向かってどのように効果的
に働きかけるかが大切になる。この点もまた、すべての図
書館共通の課題であると考えている。

当館の取り組みが、他の図書館にとっていくらかでも参
考になれば幸いである。

注・参考文献

- 1) 浜口美由紀. 海外の日本語学習者への支援－国際交流基金関
西国際センターの現場から (13)「日本」をキーワードに日
本語研修と連携する図書館－独立行政法人国際交流基金国際
センター図書館の仕事. 日本語学. 2004-01, vol.23, no.1,
p.66-77.
- 2) 浜口美由紀, 畠中朋子. 日本語学習者に向けた情報リテラシー
教育－日本研究に役立つ情報検索ガイド実践報告－. 国際交
流基金日本語教育紀要. 2013, no.9, p.159-166.
- 3) 浜口美由紀. 世界の国からこんにちは：公民館図書室での多
言語読み聞かせ報告. むすびめ 2000. 2015-07, no.91,
p.16-18
- 4) 国際交流基金関西国際センター編著. 図書館のしごと：より
よい利用をサポートするために. 第2版, 読書工房, 2021,
233p.
- 5) “図書館 | 国際交流基金関西国際センター”. <https://www.jpf.go.jp/j/kansai/library/>, (参照 2024-12-17)
- 6) “おはなしの会“はっぴいぶっく””. <https://ohanashinokai.happybook.web.fc2.com/>, (参照 2024-12-17)

Special feature: Overseas Materials Research and Managing in the 2020s: Focusing on Initiatives at Libraries. “‘The library welcomes you!’ -From The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Kansai Library-”. Kana IMANISHI, Takashi KAWATA (The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Kansai Library, 3-14 Rinku-Port-Kita Tajiri-Cho Sennan-Gun, Osaka, 598-0093, Japan)

Abstract: This report describes how a small specialized library with a collection of 57,000 volumes serves participants from all over the world and supports their training activities. This is a practical report on the role of the library in the training activities conducted at a Japanese language training center.

Keywords: Library / international exchange / training in Japan